

江源氏鑑

十



部	部
番号	番号
年月日	年月日



寄	贈
明治廿貳年以降本校卒業生三百十八名	
大正	七年
	六月
	八日

迎向八系 十一月
 日 三十一日
 改訂 年

江源武鑑卷第十

西永祿五^{壬戌}年

大正正月 朔日ヨリ五日ニ至テ雪下ル江北ニテ五尺ニ

余ル旗頭等觀音城出仕ノ次第例年ノコトニ

十五日屋形江陽ノ八幡宮へ社參今日申刻

地震和田山城南ノ石垣七十二間崩ル

廿八日馬淵源太郎ヲ越州ノ長尾へツカハシ

玉フ密狀ノ旨不知



二月

十三日尾州ノ織田家ヨリ使節アリ織田市
介信成ト云者ナリ信長近日濃州へ又働へ
キノヨシナリ依之御加勢ヲ頼ノヨシナリ屋形
其義ニ同シ尾州ヨリ一左右次第ニ江陽ノ
加勢ヲ出シ玉フヘキノ御返事アリ

廿四日屋形ノ母公病氣甚ニ依テ御一門ノ
面々旗頭等不殘觀音城ニ馳集ル箕作ノ兼
禎公父子モ登城ナリ後藤但馬守淺井備前

守ニ密談スルハ兼禎公父子登城アル事子カフ
所ノ幸ナリ押寄せ討ント云備前守カ曰義
ニ非ス逆ニ人ヲ害スル事アレハ必國家ヲ
乱スノ基ナリ往々兼禎公父子國ノガイト
成ル人ナラハ其節ニ當テコソ其義ニコソ
及ハメトテ止リキ

三月

三日佐々木御社祭礼例年ノコトニ屋形并
御一門ノ面々旗頭等不殘供奉ニ彼宮ニ詣ス

箕作後見兼禎公父子ハ社參ノ義ナレ是ハ
去月兼禎父子ヲ後藤淺井カ討トレテ既ニ
討ントセシ事ヲ兼禎父子傳聞玉ヒテ如此カ
其下心ヲ不知

廿三日將軍家ヨリ細川兵部大輔藤孝ヲ江
州ニ下レ後見兼禎父子ト屋形トノ御申ヲ
和シ玉フヘキノ上意ナリ屋形藤孝ニ向テ曰
吾一家ノ中不和ノ義ナレ何ニ依テ中和ス
ヘキ事ナレト也藤孝答テ曰近年後藤淺井

ノ御家人兼禎父子ヲヤ、モスレハ討ントスト
云事京都ニテモ其聞アリ依之將軍家國ノ
乱ヲ静メ玉フヘキトノ事ナリ上意ノ旨ニ任
セテ兼禎父子ヲ當城ヘ召レテ中和可有ト
ナリ屋形ノ曰將軍家押テ以テ左様ニ思召
ハ應其御心トテ則箕作ノ城ヘ平井加賀守
ヲ御使ニテ兼禎父子ヲ招請アル兼禎公父
子即從四百余騎ヲ卒ニテ觀音城ニ出仕ス
後藤淺井大手ノ大門ニ出向フテ同道ス上

使細川藤孝將軍家ノ仰ヲ兼禎父子へ語テ
管領ト兼禎父子中和ノ義ヲナシ玉フ兼禎
上使細川藤孝ニ向テ吾毛頭下心ナキ旨如
此トテ一通ノ起請文ヲ書テ渡サル上使藤
孝此上ハトテ御盃ヲ請出テ万歳ヲ祝サル藤
孝吾不肖ノ身トシテ大事ノ御使ニ罷下テ
候ニカヤウニ首尾仕事何事カ是ニシカントテ
一首ヲ詠セラル其詞アリ於之兼禎
コホリ井津田ノ入江モ打トケテ國モユタカニ春風ソ吹

屋形甚悦シテ藤孝ニ龍雲ト云名馬ヲ送り
玉ヒ又旗頭等モ近年上ハ何ノ事故ナフシテ
説ク多シテ今ハ管領箕作ノ城へ寄ラル今
ハ後藤淺井兼禎ヲ攻ムルナト云テタカヒニ
兄弟ノ間モ是ハ管領ノ御方ナリアレハ後見
兼禎ノ方トテ旗頭ノ内モタカヒニ心ヲヘタ
テ己ニ今下心ナク將軍家ノ御下知トシテ
中和スル事目出度事ナリ是ヨリハ屋形モ
兼禎父子ヲ愛ヒシ玉ヒ兼禎公モ二心ナケニ

毎日觀音城へ出仕し玉ふ

四月

八日尾州ヨリ使節アリ織田九郎信治ト云

人ナリ上総介信長ノ舍弟ナリ密談ノ義ニ

依テ不知

十五日屋形進藤山城守尾州ノ織田家へツ

カハス其勢七百三十騎南郡ノ御家人十三

人進藤カ手ニ付テツカハシ玉フ何ノ義ニ依

テノ加勢トモ不知

廿日東方酉剋ニ白氣三筋立テ戌亥剋ニ至

テ赤氣トナル上月甲斐守秀具卒ス管領ノ

近習ナリ

廿八日尾州へツカハシ玉フ進藤山城守江陽

ニカヘツテ密シテ言上スル事アリ其子細ヲ

不知近年織田上総介信長ノ聲トナリ玉ヒ

テ後ハ密談ノ事ヲハ後見兼禎公へハ御相談

ナクテ何事モ淺井ト後藤ニ御評定有テ後

ニハ織田家へ御評義アリ後見兼禎公怒ラ

心裏ニ含玉フハコトハリナリト云

五月

朔日尾州ヨリ使節アリ織田家ヨリノ狀ニ曰近日西美濃へ出陣アルヘキナリ然ハ江州ヨリ勢ヲ出サレ兩方ヨリ齊藤右兵衛大夫龍興ヲ攻討ヘキトナリ屋敷使節林佐渡守ヲ御國ノ間ニ召寄ラレ信長へノ御返事ヲ直ニ仰聞テラル其仰ニ曰何ソ龍興コトキノ弱將ヲ攻討シニ尾州江州ノ兩旗ヲ以テ攻ハ遠國

マテノ聞ヘモ不可然唯信長一旗ニテ追討可然ト可申トナリ御密狀ノ内ハ不知

六日尾州ノ織田家ヨリ使節アリ今月三日信長西美濃ニ至テ發向ニ數箇所放火ス其勢八千七百騎ナリ齊藤龍興七千騎ニテ信長持ノ九條ノ城へ押寄又信長洲役ノ城ヨリ九條ノ城へ加ル午剋ヨリ合戦始テ申剋ニ終ル龍興力武大將稻葉又右衛門力首尾州へトル其外サイハイ首四ツ取ル尾州方ニハ織田

十郎左衛門力第勘解由左衛門信名討死ス
此合戰夜ニ入ル戌剋ヨリ大雨下ル敵味方
相引ニナル明四日信長濃州表ノ城々ヲ攻
ヲサヘノ爲ニ犬山城ニ織田十兵衛尉三百五
十騎洲役城ニ池田庄三郎四百八十騎九條
ノ城ニ佐久間大學三百二十騎ヲサヘト
シテ尾陽清洲ニ歸城ナリト云々
廿日三好修理大夫義次ヨリ使節アリ近日
上京有ヘキ由ナリ依之屋形旗頭等ヲ引卒

レ今曹子剋ニ上洛アル御勢一万八千ナリ
江北ノ旗頭中ハ觀音城在番トシテ供奉セ
ス江西江南ノ旗頭等ハ不殘上洛ノ供奉ス
今度三好上洛ハ嫡庶ノ論ニ依テ也屋形下
心ヲ不知イツニ替テ多勢ニテ上洛ス
廿九日三好修理大夫義次訪ル條々相叶テ
國ニ退ク依之屋形今日酉剋江陽ニ歸座シ玉フ
六月八日
十九日美濃前國主土岐範賴宰人ニテ近年

尾州ニ居玉フカ今日江陽ニ來テ箕作ノ後
見兼禎公ノ扶助ヲ請テ高野ト云所ニ居住
セラルル也
右此人ハ代々美濃國ノ屋形ニテ今範頼ニテ
一代ニ至マテ家門榮久ナリシニ去ル天文
年中ニ家人齊藤右兵衛大夫龍興カ父山城
守道三ト云者ニ住國ヲセハメラレ國ヲ去リ
玉フ人ナリ其比美濃國ニテラク書ニ土岐
殿ヲサミシテ

十五岐ハレトノリタテモナキ四ノ袴

美濃ハトラレテヒトノ成ケリ

ト立タリトナン武ノ器ニ當リ玉ハサルニヤ
件ノ齊藤道三ト申者ハ元來ハ山州西園ノ
百姓タリシカ一年美濃國ニ下テ土岐殿ノ
家人長井十兵衛ト云者ヲ主ニトリ後ニ長
井カ跡ヲ押領シ土岐殿ヲカスメテ旗頭等
ニトイナイヲ與ヘテ終ニ土岐家ヲ押出し
美濃國ヲ押領シタル惡逆人ナリ委ハ日記

ニノセス猶土岐家ノ日記ニアルヘシ尋見ヘシ
廿七日後藤但馬守カ屋敷ニ夜毎ニ白キ氣
立ツト衆人謂合事有テ今日屋形ノ御耳ニ
立テ今夜直ニ御ラニ可有トテ觀音城南櫓
ニ上リ玉ヒテ見玉フニ果テ衆人ノ説ト夕
カハス後藤居城ニテモ如此ト云珍事ナリ
易者ノ曰甚不吉ノ兆ナリト云云云云

美七月十日
十五日屋形ノ母公江西三井寺ニ詣ス彼寺

女人禁制ノ寺ナレトモ開山智證大師御母
大師ヲ懷敷ク思ヒ玉ヒテ老ノ後ハ常ニ相
見ノ事ヲナケキ玉ヘハ大師三井寺南志慮谷
ト云所ニ一字ヲ立テ御母ヲキ玉フテ學
士暇ノ日ハ折々母公ノ方ヘ參リ玉フ御母
大師ノ住寺ヲ見タキ望ミフカケレハ七月
十五日ヲ一日免シ玉ヒテ御母ヲ寺ヘ入玉フ
此例ニ依テ今ニ至テ七月十五日辰ノ刻ヨリ
轉刻ニテ貴賤ノ女ヲ彼寺ニ詣サスト云云

志願谷ヲ書ハ知谷ト書タリシヲ大師御母
ヲカレテ後母ノ志ヲモシハカルトテ
志願谷ト書玉フトナリ委ハ彼大師ノ御廟
ノ記アリ
廿三日屋形平野田中坊道圓ニ仰付テ祖母
ノ爲ニ志賀郡和介ノ庄ニ一宇ヲ建立スル
西岸寺ト号ス後谷口寺ト國人云左寺ナリ
大相八月嫌々思コ玉コテ送ル
本五日屋形近習計ヲ召具シテ江西ノ石山ニ

詣テ玉フ今日近衛殿三條殿石山ニ來テ月
ヲ見玉フ屋形甚真シテ石山秋月ト云題ヲ
出サレテハ御兩所詠哥一首ツクヲヨミ玉フ

近衛殿

石山ヤニホテ九月ノサヤケキハ唐土マテモ曇ナカルラニ
三條殿
聞シヨリ心ソ清ル石山ノ月モヒカリク數メテテ瓦
屋形ノ御小姓ニ馬淵千世熊丸今年十一ニ
成リシカ三條殿ノ御前ニツイ居テ一首仕

ハキト云近衛殿聞玉ニテヤサシキ小童ナリ
ハヤクト有レハ
石山ヤニホノ海テル月影ハ明石モ須摩モ外ナラヌ哉
ト古哥ヲ詠シケレハ近衛殿三條殿珠真ニ入
玉フ此哥ハ近江八景ノ其一ツナリ吾國ノ
名所哥トテ予馬ノ暇ナキ身トイヒ小童ト
云旁以テ希異成トテ甚真シ玉フカ近衛殿
尚及イヒテ千世熊丸カ扇子ヲトツテ委細
ニコトカキシ玉ロテ近江八景ヲ書付テ千世

熊丸ニ與ヘラル其扇子ニ書玉フニ
永祿参の女八月十五の夜 予カとありひつて
江面る山の月とまひとそ 三多の前亞相とつれ
て初とまのひつてうありもまかりぬるに苗圃の
園守は幾多折しもあまのいよと月うらとそ
け幸にまろりてとれとみそあまうらに與て
あそひ侍りたり園守る山の秋月とまに字と
いふてまろりちとのまひとあまのいよとま
て和歌一弁とつりちとあに園守の小童

十にあまのうらとみかろのあひくさしよひとらふ
 こゆるまよふまんとらふしてはあのかたがとらふ
 よしあきらむらうのあひよしておまにひまらふ
 かのこらふよふまんとあひかたふまらふにひき
 あそれにあひくゆれらのまらふのこらふに
 あひあきらむらう月のひらうとたふらにあひま
 いらのけいとうまらふよらうにまらふあ
 きていらのけいとあひくちのあひまらふあ
 きのこらふとらうてらうにのあひくさし

おまらふのこらふとらうてらうにのあひくさし
 ちらうてらうのあひくさし

比良暮雪

おまらふのこらふとらうてらうにのあひくさし
 堅田落鴈
 おまらふのこらふとらうてらうにのあひくさし

矢橋歸帆

まらふのこらふとらうてらうにのあひくさし

栗津晴嵐

栗津晴嵐の歌

三井晩鐘

三井晩鐘の歌

石山秋月

石山秋月の歌

勢多夕照

勢多夕照の歌

唐崎夜雨

唐崎夜雨の歌

よりのぬにもとゆつて夕凡とトをにさそそし海の

世又甚不吉ハハ 近衛前關白勇の後とありて

去るまじ下免へつせるまきう海のなる所と人のなるま

右ノ通ヲ扇子一面のうらに書玉イテ千世

熊丸ニ與へ玉フ 珍鳥館入番時ハ其一也

翌日御兩人ヲ御同船ニテ勢多ヨリ津田ノ

入江ニカヘリ玉フ船中ニテ近里遠山ノ題ニテ

近衛殿三條殿詠哥アリ日記ニノスルニ不及

廿日近衛殿三條殿多賀社ニ詣玉フ屋形ヨリ

後藤但馬守日賀多攝津守兩人ヲ案内ノ爲
ニツケラレテ攝津守日賀多ノ命ニ依リテ
九月八日入ノ御所上京ス
九月九日酉刻苗原社鳴動ス番神ノ其一社ナリ
十九日白髮大明神ノ前海ノヲモテ一町ホト
澳ニ石ノ鳥井アラハシ出ル同廿四日ヨリウ
世又甚不吉ノ兆ナリト云古來ニモ聞スト
イヘハ平井加賀守カ曰昔日康安元年天下

逆乱ノ時白ヒケノ前二三町余ノ橋出ル又竹
生嶋ヨリ箕浦へ三里余ノ所ニ海中ニ石橋
出タル事アリト舊記ニ有リ前代モアル事
ニコソト云トカク國家ノ破レニ兆ト國人大
キニアヤフメリト
廿四日澤田武藏守忠高入道覺雲齊卒ス行
年八十三歳江北ノ旗頭ナリ屋形三代氏綱
義實當屋形ニ至テ度々ノ軍忠アル翁ナリ
屋形甚々悲シテ澤田庄ニ一字ヲ建立シ忠

高寺澤田山十号に其跡ヲ深ク吊ヒ玉フ寔
忠臣ノホトウエヤム計ナリ也
辛巳十月
十四日大津ノ奉行大津日向守秀持年來ノ
非義悉クアラハレ進藤山城守去年ヨリ頼川
シカ今日其沙汰有テ屋形ノ御母公青樹院
殿御助免ニ依テ其一命ヲ助ケラレ國ヲ追
拂シ玉フ美濃へ三里余入預テ備中守
廿七日將軍家松田石見守ヲ自ラ誅ス其罪

ヲ不知
十二月

朔日ノ夜子剋何ノ事トナク京中大キニサ
ワク事ヲ聞ケハ逆心ノ人有テ將軍家へ寄
來ルト云明レハ二日何ノ事モナレ誠不吉
ト兆ナリト云後ニ此事ヲ聞ニ四條邊ノ可
屋ニテ酒ニヲホレタル者共十人討天下ノ御
所ニ逆心ノ人アリト呼ヘリ是ヲ次第ニ聞
傳テ右ノコトクニサワキツルトナリ

廿五日天神ノ縁目ニ依テ將軍家彼宮へ社
參アリ是ハ去夜將軍家ノ御夢想ニ
天下時雨ルカケノ木葉哉上云一句ヲ見玉ヒテ
今日北野宮へ社參シ玉フ將軍家ノ御賜ニ
フレハカタミル御代ノコトヲキトツテ玉フトナリ
時ノ華ノモト羨テナニシケルニ甚惡夢ナリ
ト云雖然時ノ權威ニ恐レテ吉兆ナリト祝ス

十二月

十三日三井寺門主化玉フヨシ大津ノ奉行

大津傳十郎カ方ヨリ觀音城ニ言上ス屋形
年來志ヲ通シ玉ヒシ御門主ニテ御座シケル
進藤山城守ヲ以テ三井ニツカハシ玉ヒ御葬
礼ノ義ヲ念比ニトリ行ヒ玉フ又ヤハシ
廿五日箕作ノ右衛門督後藤但馬守カ居城
津川ニ移リ年來ノ惡念ヲ悔ユルトノヨシヲ
云テ則後藤カ女ヲ望ミル後藤屋形ノ仰十
シレテ嫁娘ノ義トリムスフ事御制法ノ内
ナレハ叶フニシキヨシヲ云右衛門督サラハ

言上ニ申請ヘキトテ永原大炊頭ヲ以テ屋
形ノ御耳ニ立ラル屋形後藤カ心中ニ任ス
ヘキトナリ後藤モアナカチニ嫌ヌヘキ聲
ニアラサレハ此事首尾シテ余日ナシトテ九
九日吉日ナリトテ後藤カ女ヲ箕作人城へ
嫁入レ玉フ年來後藤ト箕作殿父子ハ上ハ
ヨクテ下心ニハタカヒニ害心ヲ含メレシカ今度
以縁邊ニテ何事モナルク成テ國中ノ人民
モ安心シタルト見ヘタリ

平井加賀守伊達出羽守ニ語テ曰右衛門督
直キニ後藤カ館ニ入永原ヲ以テ女ヲ乞請
ラル事心難シ屋形モ御思惟ナク可然トノ
御下知ハ如何アラシ義弼元來ハサヲ好
血氣ノ勇者ナリ血氣ノ人ニ何ソ信實心ア
ランヤ一旦ノ思立ニコソアラント云伊達出
羽守申ハサモアラシカ併近年義弼屋形ノ御
氣色アリ、依之其御下心ヲ解ンタメニ後藤
カ女ヲ自ラ乞請玉ニソアラント云テ止キ

永祿六年

正月

朔日ヨリ三日ニ至テ大雪下ル箕作義弼例
年ニ替テ後藤ト父子ノ縁ヲ結ハレテ今日モ
同道ニテ觀音城ハメツラレキ年始ノアリ
サマヤト京極長門守高吉進藤山城守ニ
カタル
八日屋形箕作義禎公ノ館ニ移リ玉フ近年
遂ニ屋形箕作入玉ハサリレカ今年始テ御授

ユヘニ義禎父子ノ奉公モテナレ限ナレ後藤
水火ノコトクニアリレカ右衛門督ヲ聳ニ取
テヨリハ万事申合テ親子ノコトクニアリレ
十三日淺井備前守長政カ小谷城ニ屋形移
玉フ同十八日ニ觀音城へ歸座シ玉フ此間
淺井父子善ツクシ美ヲツクシテ屋形ヲモ
テナス

十二月
十五日ニ東光寺ニテ前屋形義實公ノ御年

忌^キアリ今月三日ヨリ万部ノ妙典^{ミョウテン}アリ今年
七年忌ニテ如此江陽^{コウヤウ}御一門中旗頭^{ハタカシラ}中不殘^ス
彼寺ニ參ル

廿四日將軍家三好^{ミヨシ}日向守カ館^ヤニ移^{ウツ}リ玉フ
兩三日ノ御遊^{ユウ}真^{マコト}アリ

十三三月

三日佐々木社祭^{ササキ}礼例年ノコトク屋形^{ヤヅリ}病氣^{ヒヤツキ}ニ
依^ヨテ社參^{カサマ}ノ義^ギナシ其外箕作^{ヒノサキ}殿父子^{トコ}御一門
ノ面々并旗頭^{ハタカシラ}等不殘^ス社參屋形ノ御代官^{ミヨシノカミ}トシ

進藤山城守^{シノダ}繫束^{ヒキムス}ヲ帶^{オビ}シ彼宮^{カミヤ}ニ向^{ムカ}フ午剋^{ナヒ}
此裡^{ココ}箕作^{ヒノサキ}右衛門督^{ウヱモンカミ}近習^{チカシブ}ヲ集^{アツ}メテ密談^{ヒソカニ}セラ
ル事^{コト}アリ毎夜^{オノオノ}門戸^{カド}ヲ閉^トテ人ヲ不^ス通^トトナリ
廿三日午剋^{ナヒ}後藤^{ゴトウ}但馬守^{タマノカミ}息又三郎父子^{ミツロウトコ}ヲ箕
作^{ヒノサキ}城^{シロ}ニテ右衛門督^{ウヱモンカミ}討^{ウツ}之^{コト}義弼^{ギシ}同日未剋^{マダナヒ}觀音
城^{シロ}ニ出^デ仕^シシテ言^{コト}上^ウスルノ旨^{メシ}後藤父子^{ゴトウトコ}ヲ種^{タネ}
村^{ムラ}彦四郎^{ヒコヨシ}建部^{ケンベ}采女^{サメメ}正^{マサ}兩人^{ニヒト}シテ討^{ウツ}種村^{タネムラ}建部^{ケンベ}
其場^{シノ}ヨリ欠落^{カケツク}仕^シノヨシヲ言^{コト}上^ウアル屋形^{ヤヅリ}トカウ
ノ御返^{ミヨシノカエ}事^{コト}ニ不^ス及^ハ右衛門督^{ウヱモンカミ}重^{オモシ}テ言^{コト}上^ウスヘキ

旨ナウレテ箕作ニカヘラル
同日旗頭中聞カケニ觀音城へ馳集ル面々
一番ニ京極長門守高吉朽木宮内大夫貞繩
淺井下野守祐政同備前守長政蒲生右兵衛
大夫氏高駒井美作守氏宗同兵部大輔氏隆
吉田出雲守秀重澤田筑前守忠冬同兵庫頭
忠繼山崎源太左衛門尉秀家青地伊豫守秀
資鯨江美濃守實春同又一郎秀國和介越後
守氏條山岡美作守實俊高宮三川守信氏池

田但馬守秀政同孫二郎高政和田和泉守貞
國同中書秀純片桐備後守實光赤田信濃守
信光又徳左近兵衛尉實時木村豊後守宗重
等ナリ屋形何モ御對面アツテ何ニ依テノ
出仕ノヨシヲ仰出サル御返事申人ナシ屋形
重テ曰トクク面々居城ニカヘラルヘキナリ
タトヘ右衛門督逆心スト云トモ在番ノ面
面アレハイカヤウニモ計フヘキトテ廿四日不
殘御暇玉フテ居城々々ニカヘリ又

同日屋形觀音城在番人面々ヲ召シテ仰付
ラル條々ハ今度後藤父子箕作ニテ相果タル
ヤウス委穿鑿可有之上テ後藤カ家人前田權
内宇野七兵衛尉等削角内左衛門ヲ觀音城
ニ召寄進藤山城守ヲ以テ糺明シ玉フニ前田
權内カ曰去月ヨリ右衛門督殿近習ヲ集メ
門戸ヲ閉テ評義ヲイタサシ之事ノ候近習
ノ内野村丹後守ヨク其子細ヲ存テ候上申
サアラハ野村ヲ召セトテ觀音城ニ召寄テ

進藤山城守問フニ初ハ後藤父子ハ種村建
部兩人ト變六人爭ヒニテ箕作ノ二ノ丸ニテ
相果ノヨシヲ云進藤重テ曰後藤ハ義弼ノ爲
ニハ親分ノ人ナリ何ソ其程ノ事ニ後藤ヲ
討セ義弼ヲメクト種村建部ヲ落スヘキ事
ナシ去月ヨリ近習ノ面々ヲ集メ右衛門督
毎夜御談合有之ヨシ傳兼此評義ハ何ノ義
ニ依テノ評定ハ國人政務ノ事ニテアルニ
又近國ヲ乱シ可取トノ義カ何ノ道ニテ屋

形ノ下知ナクシテ自身ノ働ハ何モ成ラシキ
事ナリトカク去月ヨリノ評定ノ儀ヲ聞ニ
ト山城守理ヲツクシ間ハ野村チニスルニ
所ナウシテ悉白狀ス元來義弼江州ノ管領
職ヲウハイトツテ屋形ヲノリツフニ江陽ヲ
シラントタクマレ候事三年以前ヨリアリ依
之後藤父子ハ前屋形ノ取立ニテ殊大名ナ
レハ此者サヘナクセハ後ハ國ヲ押領スルニ
心安カラントヲモハシテ近習十八人ノ面々

ニ靈社ノ起請文ヲカ、セテ去月ヨリ後藤ヲ
討ヘキ評定ヲ致シ候去年極月ニ及ニテ俄
ニ後藤カ女ヲ右衛門督コイ取り玉フモ兼
テ後藤ト中惡ニ依テ後藤ヲ一家ニナシテ
心安ク討ニトノ計略ニテ候又種村建部後
藤父子ヲ討事ハ右衛門督ノ内意ニテワサト
雙六ノ真ヲハシメ争ヒテ作テ兩人ニウタセ
ラルスケ太刀ノ者ハ人皆右衛門督ノ近習
ニテ候種村建部ハ義弼ノ下知ニテ勢州ノ

國司へ落ヤルへキシタクシテアリシカ未江雲
寺ニカクシ居候也ト殘ル所ナク白狀ス此旨
山城守具ニ口書シ屋形ニ言上ス屋形大キ
ニ怨テ目賀田攝津守ニ仰付テ江雲寺ニツ
カハシ種村建部兩人召カラメ玉フ種村建
部ヲ觀音城下ニ籠ヲ作テ召ユメラル屋形
重テ馬淵與右衛門尉ヲ以テ兩人カロヲ聞
玉フニ以前野村カ申所ニ毛頭違ス
尤五日屋形觀音城在番ノ面々ニ箕作ヲ攻

落スへキヨシヲ仰付ラル在番ノ面々進藤
山城守同加賀守目賀田攝津守三井出羽守
槽崎民部少輔同太即左衛門尉平井加賀守
永原大炊頭同筑前守伊達出羽守種村大藏
大輔四人夜四郎磯野丹波守阿閉淡路守野村
肥後守永田刑部少輔堅田兵部少輔箕浦次
郎右衛門尉小川孫一郎後土佐守大宇太和守
今村掃部三上伊豫守多賀新左衛門尉三田
村左衛門尉大野木土佐守淺井雅樂頭鏡兵

部少輔野村十内左衛門尉後越中澤田甲斐守
乾主膳正山田江右衛門尉山田源太郎野村
兵庫助寺田善右衛門尉石田孫九郎池田孫
市藤堂作内右衛門尉坂田河内守町石見守
三雲十内左衛門尉木村源五左衛門尉村井
長兵衛尉京極三郎左衛門尉匹田四郎左衛
門尉蜂屋所右衛門尉等其勢一万二千騎二
元箕作以城へ三手ニ成テ向フ三夫出候也
隊云ハ一隊ニ向フ面々ハ三隊ハ面々ハ

永原大炊頭ヲ大將トシ此手ニ付ク面々匹田
四郎左衛門尉京極三郎左衛門尉蜂屋所右
衛門尉村井長兵衛尉木村源五左衛門尉三
雲十内左衛門尉坂田河内守藤堂作内右衛
門尉町石見守池田孫市郎石田孫九郎寺田
善右衛門尉等ナリ其勢二千七百騎
隊四十二番ニ向フ面々
目賀田攝津守ヲ大將トシ此手ニ向フ面々
横濱來郎左衛門尉永原筑前守野村兵庫助

山田孫太郎山田江右衛門尉乾主膳正澤田
甲斐守野村十内左衛門鏡兵部少輔等也其
勢四千二百騎
進藤山城守ヲ大將トシ此手ニ付ク面々三井
出羽守檜崎民部少輔平井加賀守伊達出羽
守磯野丹波守種村大藏大夫阿閉淡路守
野村肥後守永田刑部少輔堅田兵部少輔
箕浦二郎右衛門尉小川孫一郎大字太和守

今村掃部助三上伊豫守多賀新左衛門尉
三田村左衛門尉大野木土佐守淺井雅樂頭
等ナリ其勢五千三百騎
三方ヨリ箕作ノ城ニ押寄鯨波三度ノ調子
ヲアク右衛門督兼用意有ト見ヘテ大手へ
三雲三郎左衛門尉ニ池田三内馬淵十兵衛
尉野村仁右衛門尉戸田半内左衛門ニ二千
ノ人數ヲサレソヘ防カル南坂へハ三雲新左衛
門尉ニ高野瀨主殿頭同八郎兵衛尉水原傳

内左衛門尉等ニ一千二百騎ニテ防カル津
田口ハ四宮主税助高田大學助津田右近同
内匠等ニ七百騎ニテ防カル右衛門督ノ勢
内千二百騎ハ勢州國司ヨリノ加勢アリト
ナリ今月廿日ヨリ國司ト約シテ勢ヲカク
ニ五騎十騎ツ、箕作城へ呼取玉フトナリ
然ニ午剋合戰始テ箕作ノ坂半ニ攻ツメ義
彌ノ勢三百二十騎討シ又屋形ノ兵百五十
騎討死ス此合戰ノ鯨波ニツイテ國中ノ旗頭

等ハヤ馬ニテ觀音城ニ集ル淺井下野守祐政
同備前守長政屋形ニ言上シテ曰父子ニ彼
仰付ハ兼禎父子早速攻ツメント云屋形ノ
曰在番ノ者共若攻アクンテ見ヘハトテ止
玉フ江州東西南北ノ旗頭サテコソ義彌ノ
逆心アラハレタリトテ馳集ル事歟然ルニ
義彌ノ父兼禎落合伊賀守ヲ以テ觀音城ニ
ツカハシ其詞ニ曰吾前屋形他界ノ時ヨリ
當國ノ政勢ノ預當屋形ヲモリ立今年ニ至

ルニ菅領ノ後見トシテ國家榮父タリシニ
後藤但馬守アト方ナキ讒言ノ息義弼進心
ノヤウニトリナシ又ル所ニ兼禎イヤシクモ
國家ノ乱ヲカナシテ身アヤニリナキト
知ナカラ去年上使細川兵部大夫藤孝下向
ノ時一通ノ起請文ヲ屋形ニ奉ル是ヒトヘニ
國家ノ乱ヲ治メント思フノ外ナシ然ルニ
今度後藤父子建部種村ト與ニ乘シテ口論
ニ及ニテ諷シ事全ク義弼力計ヒニナシ

何ノ後藤カ女ヲ嫁入ノ上ハ其義アラシヤ
然ヲ野村一旦ノ害ヲ殖シニカタメ偽リシカ
ニヘ白狀スル事ヲ誠ト菅領思入至テ事悲
三ノ泪老ノ眼ニアリス何ソ兼禎父子ヲ
召レ直ニ不審ヲ聞玉ハ、何ノ曲事カアラシ
又右衛門督勢州ヨリ加勢ヲ呼取ルノヨシ
全ク屋形ニ對ヒ進心ニテナシ近年憐國境
ヲ争フニ依テ若キ者ナレハ一廉管領軍用
ニモ立ヘキトノ事ナルニ忠臣カヘツテ歎トカ

事ホケクニ余アリ就中前屋形御在世ノ時
常ニ仰ラレシモ一家内争事アレハ他邦ヨリ
アナトラル、端ト成ルト仰玉ヒシハ正ク屋形
壬聞玉フヘシ早ク此カコミヲトカレハ兼禎入
道ノ首ヲノへ觀音城ニ出仕シ非義ナキノ旨
ヲ言上セシ息右衛門督事元ヨリ屋形ノ御
氣色ニ合子ハイカヤウニモ御心ノ通ニ計フ
ヘシトノヨシ落合伊賀守澁ヲ流テ言上ス屋
形トカクノ御言葉ナシ京極長門守高吉進テ

言上致サルハ兼禎公ノナケキノ詞家ニコソ覺
候近年ハ別テ國々不靜シテ親子ノ間モ安
心スル事ナシタトヒ右衛門督父子ヲ討取
リ玉フ共カヘツテ國ノ害ト成ル事ハ多シテ
利アル事ヲトリナント覺へ奉ルナリ早ク箕
作ノカコミヲトカレ後見兼禎ヲ當城へ召寄
ラシ義弼事ヲハ某ニ預テ玉フヘシト理一二
諫言シ玉ヘハ屋形往々國ノ害ト成者ハ義弼
ナシ共理ノ當ル所ノ諫言ヲ不入ハ盲將ノ

ワサナリトテ澤田越前守ヲ陣所ヘツカハシ
進藤目加田永原ノ三將ヲ召返サル今度ノ
合戰屋形御一家ト戰ヘハ下ハ或ハ親子兄
弟敵味方ト成テ戰カヒシホトニ一足モ後ヘ
足ヲフニカヘス者ナシ半日ノ合戰ナレ共勇
臆ヲニカキタル事ナリ江州ノ土民屋形ノ
味方合戰ト云ハ是ナリ

廿六日兼禎公觀音城ニ登城ス屋形病氣ト
号シテ對面セス兼禎空ク箕作ニカヘリ王ヲ

同日未剋進藤山城守ヲ御使トシテ義弼ヲ
京極長門守高吉ヘ預ケラル酉剋ニ義弼近
習十八人ヲ供トシテ兼禎公ニ引分レ血氣
ノユヘト云ナカラ數年住ナレタウ箕作ヲ
スコノト立出テ京極家ノ氏寺清瀧寺ニ入
玉フアワレナリト云

廿七日屋形ヨリ澤田越前守ヲ使節トシテ
箕作兼禎ヲ觀音城ニ呼寄ス兼禎鬱憤有ト
イヘスモ力ナク出仕セラレ屋形對面ス御詞

二曰義弼コト近年非義多し然ニ今度後藤
但馬守父子ヲ討シ事評定スル所ノ者白狀
スルノ上ハ其疑フ所ナシトイヘ共違テワビ事
ノ上ハ其義ナクテハト思ヒ其上父御遺言ノ
條々ニモ一家ノ中争フ事アレハ必ス他邦ヨ
リ入端トノタニイシ事は一兼禎ノ御事ハ
父ノ他界ノ後ハヒトヘニ慈父ノ如クニテ國
ノ政務ニカハリ玉フ人老ノ眼ヲウルワシテ
種々申玉フ是ニ京極高吉理一二諫言致ス

ニ一應不用ハ將ノ非礼ナリト思フテ其諫
言ニ應スルナリ是三カタク以テ今度ハ助
命ニ高言ニ預テ置ク所也ト仰出サレヌレハ
兼禎公詞ナク紅涙シテ退出シ玉フ
晦日今度箕作表ニテ抽軍忠タル士卒ニ今
日屋形賞ヲ行ヒ玉フ

四月

二月右衛門督義弼ノ知行所ヲ一所モ分チ
玉ハスレテ後見兼禎公ヘツカハシ玉フ兼禎公

ハ去ル三年ノ冬、隱居ニテ家督ヲ義弼ニユツリ玉フテ、栗本郡ノ内十八箇所計ヲ領シ玉フニ、今義弼ニユツリ玉フ所領ヲカヘシツカハシ玉ヘハナケキノ中ノ、況ト申合ヌ。同日兼禎公、觀音城ニ登城シ玉フ所ノ所領ノ礼ヲノヘ玉フカ、涙袖ヲヒタシケレハ屋形モ御心ヤカナシ三ヶ所、御涙ヲ流シ玉フ當番ノ旗頭中何モ袖ヲヌラス。廿四日兼禎ノ二男賢永ヲ嫡男ニ立ラレキ。

スヨシヲ箕作ノ館ヘ屋形進藤山城守ヲ以テ仰ツカハス兼禎公山城守ニ向テ曰、次郎賢永ハ前屋形ノ仰トシテ大原中務大輔高保ノ養子ニナシ玉フニ、今又カヤウニ侍ラニ事且ハ前屋形ノ仰ヲモダスニテ、候ト申サレケレハ山城守カヘツテ此旨ヲ言上ス屋形仰出スハ家父ノ遺命ヲモトクニ似タリトイヘトモ存旨アリトカク嫡男ニスヘラレ可然トナリ賢永嫡男ニ致サレハ兼禎ヘツカハス所ノ所

領等一所モ不殘賢永ニユツリモヒテ本ノ如ク兼禎ハ隱居ニテアラニ事甚可然ト重テ仰遺ス兼禎公此上ハトカウニ不及トテ次郎賢永ヲ嫡領ニスヘラレ
今月二日午剋ニ洛南ノ東寺ノ塔雷火ニテ燒タス

五月

五日佐々木御社祭礼今年ハ旗頭等一人モ不殘立願ノ義アツテ神輿ノ前後ニ美ヲツ

クシ善ヲツクシテ渡ルモノ其數ヲ不知ラ十五日ヨリ廿二日ニ至テ八日ノ間夜晝ノ内六時四時ヲヘタテ、雨下リ河内國半國水ニヒタリ人民一方六千余死ス山州賀茂川ノ水四瀨ニ成テ流京東ノ町數二十三町ハ水ニ流レ或ハヒタル國々ノ水亡記ニイトニナシ江州ノ湖九合ニ成ル浦々在々九百七十五箇所水中ニナル河々大水堤共キレ在在ノ損スル事前代ニモ不聞ト云

六月

十日將軍家京中ノ地子錢ヲ赦免シ玉フ此
時ノ洛中奉行ハ松田對馬守宗賢澤田若狹
守忠永ト云人兩人ニテ公事等ヲ進退ス
廿四日將軍家愛宕山ニ參詣シ玉フ近習計
ヲ召具セラハ廿五日歸洛シ玉フ
内六七月
四日奥州會津ノ屋形盛高二本松國治ヲ討
テ彼國大キニ乱ル、ノヨシ今日東國へ回リシ

例ノ山伏大泉坊カヘツテ言上ス前屋形ノ御
代ヨリ江州一國ノ山伏陰陽師ヲ國々ニツ
カハシ其國々ノ善不善ヲ聞玉フ是ヲ例ノ
山伏トハ申ナリ
十四日十五日將軍家洛東ノ川原ニ高一間
ニ棚ヲ作テ一萬ノ燈籠ヲナラヘ兩日ノ間
一時モト、コヲラス一萬人ノ僧ヲナラヘ念
佛アリ役人ノ僧食事ノ時ハ志ノ俗人等其
間ヲツトメ念佛ス是ハ去五月近國遠國ニ

水ニシテホレテ死スル者ヲカヤウニ吊ヒ玉フ
トナリ有難キ上ノ心哉ト世人諷セリ
廿八日屋形後藤喜三郎ヲ取立テ但馬守カ
所領ヲ與ヘ玉フ後藤父子カ跡ヲ念比ニ可吊
ノヨシヲ目賀田小三郎ヲ以テ被仰付後藤
信ニ忠フカキ者ナルニ依テ如此没後ノ賞ニ
預ト三ヘタリ

八月廿一日新庄伊賀守ト今井刑部左衛門ト嫡庶

ノ論アリ今日屋形雙方ヲ觀音城ニ召シ其
論ヲ糾明シ玉フ今井非義ニ極テ所領等ヲ
召アケラレ蒲生右兵衛大夫ニ預ケラル
廿五日江北ノ天神ノ社ヨリ光出鳴動スル
事甚シ此旨早馬ヲ以テ今日酉刻ニ京極長
門守高吉ヨリ觀音城ヘ言上ス甚不吉ノ兆
ナリト云
九月廿一日大明國ノ雪峯子ト云儒者本朝ニ渡テ

今日將軍家ニ見ユ雪峯子天地日月星辰五行陰陽太極無極ノ圖ヲ書テ將軍家ニ奉ル南禪寺妙典和尚將軍ノ御傍ニ伺公シテ是ヲ聞問答ス雪峯子カ書前ノ圖ハ不信ノ事也

雪峯兩曜之圖



日輪形

兩獸之圖



日輪形
月輪形

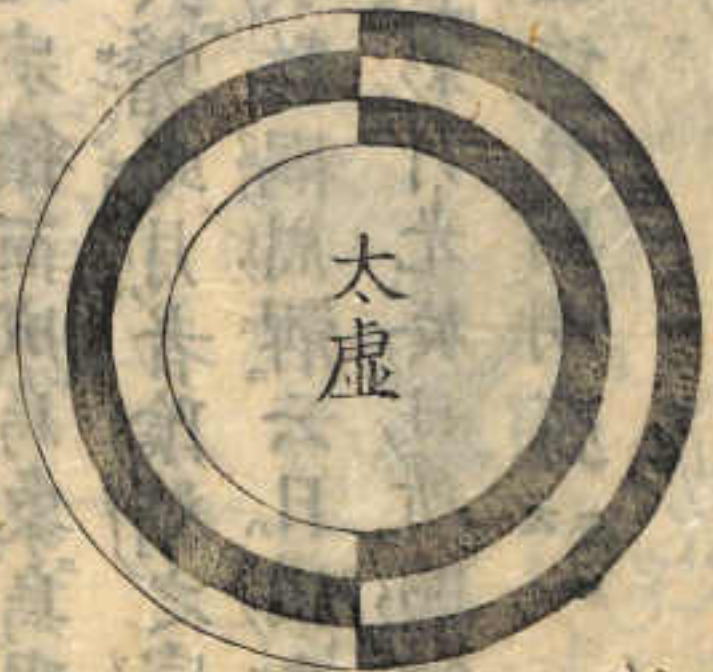
雪峯子曰兩曜說日中有駿鳥謂三足鳥日者
 陽精之宗積而成鳥象鳥陽之類其數奇月中
 有兔與蟾蜍月者陰精之宗積而成獸象兔陰
 之類其數耦周髀云日猶火月猶水火則施光
 水則含影月光於日所照魄生於日所蔽當日
 則光盈近日則明盡云

太極圖而土測

太極示外之圖

太虛元化之圖

太極動而生陽



限水盈
水則合
火則
麻疎
樹濶
雷峯

太極靜而生陰

此圖之機其端皆自中
以八極水火四象
深辨而大樽者
其端皆自中

天圓如倚蓋

天三

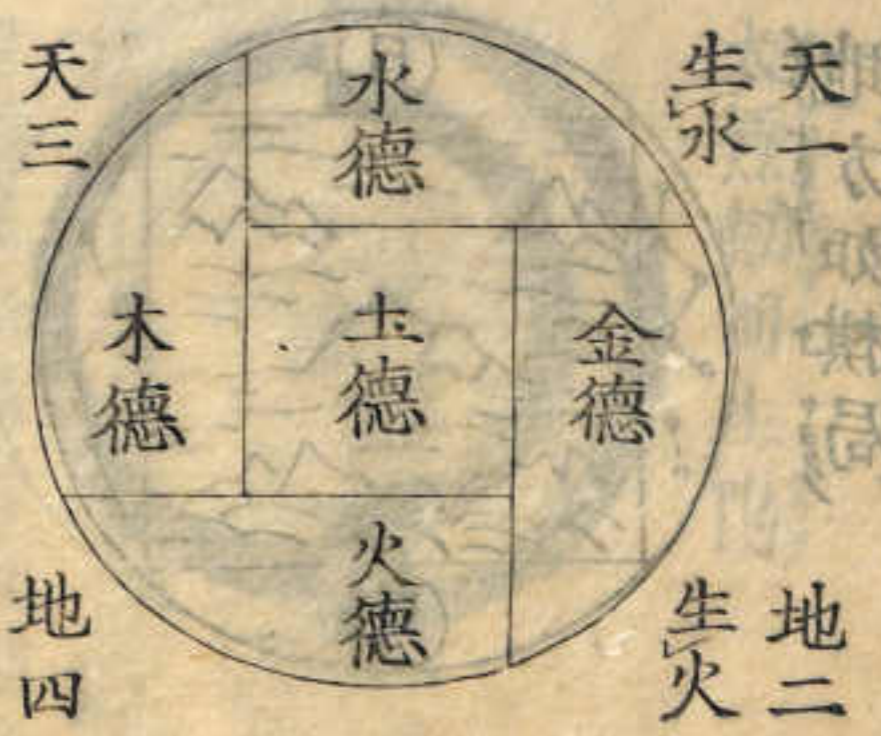
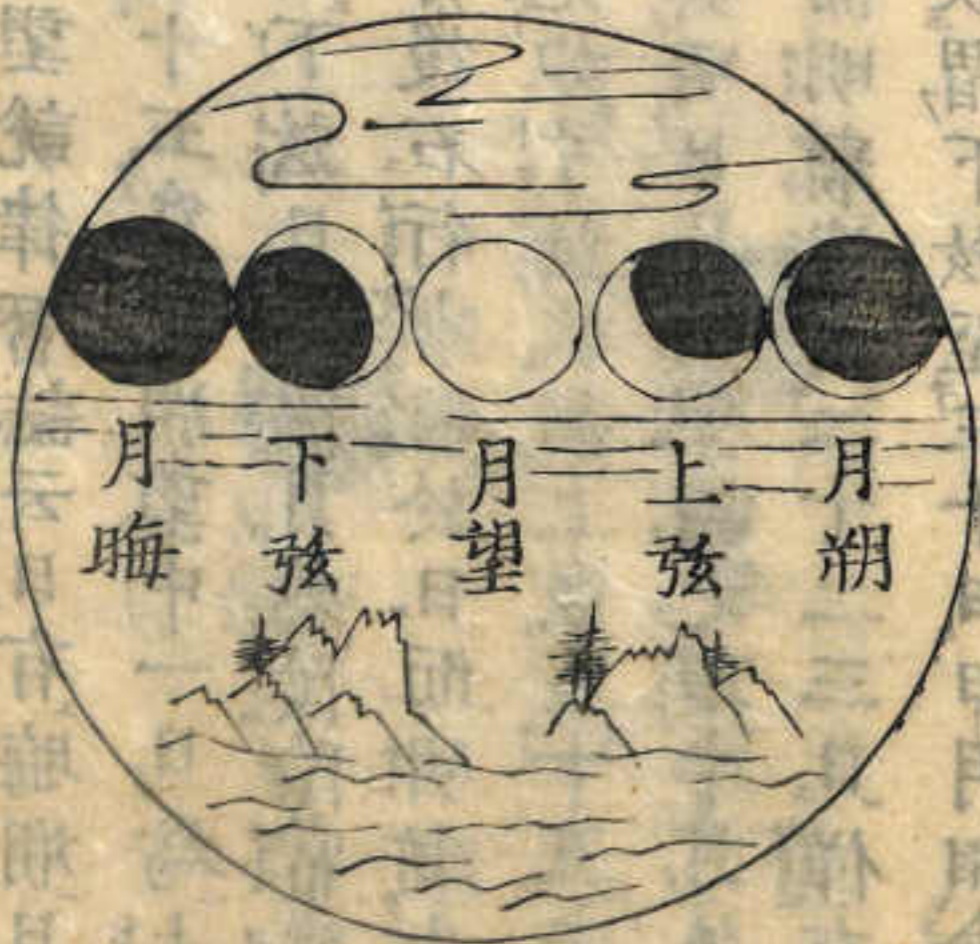


地四
主金

地方如棋局

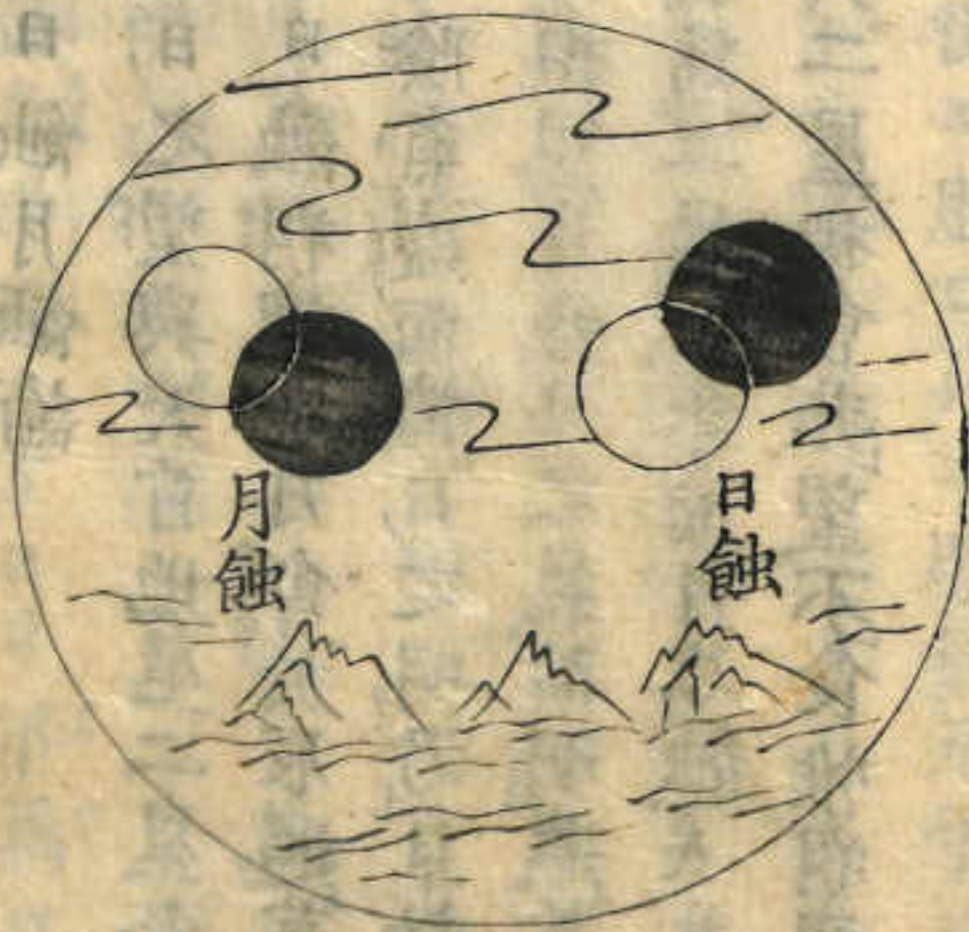
地二
主火

蓋如晦朔弦望之圖



晦朔弦望說律曆誌云日有晦朔月有弦望初
 一為朔十五為望朔望中一日為上弦望晦中
 一日為下弦日屬陽月屬陰陰常為陽消鑠自
 月初月後右行漸離於日而明漸生至初七八
 明半見如弓弦故謂上弦至十五去日漸遠故
 得全其明日月相望謂之望半月後則漸近日
 左畔而明漸消至二十二三日僅存半明亦如
 弓弦故謂下弦至三十日月相會月為日消
 盡故謂之晦之圖

日月蝕之圖



日蝕月蝕論

日之朔日之望與天首地尾二星會於其度而始蝕矣日蝕朔謂日月會於辰遇首尾二星則以月之陰氣盛而掩日之明乃日蝕矣月蝕望謂日月相望月得日之氣而明遇首尾二星則日之氣為二星所奪而月乃蝕矣其日一年一周天與二星相會非望不食惟朔望同度則蝕也

右ノ旨妙典和尚一一問答シテ將軍家ニ聞

分奉ラル國々ノ在番衆是ヲ書寫シ去ト
此事ヲ後ニ思ヒ見ニ慶長元年ニ大明國ヨ
リ万寶ト云書本朝ニ渡スニ此事アリ少モ
雪峯子カ書タルニ不違ト云フ

十月

十一日山門惠心院ノ僧正化ス七十三星形
ノ族ナリ馬淵攝津守屋形ノ為御名代今午
剋ニ四明山へ上ル
光日山岡光淨院カ方ヨリ早馬ヲ以テ觀音

城ニ言上ス今月三日ヨリ河内國若江ニ一
揆ヲコリ其勢三千騎ニ及フトナリ若江ハ
屋形ノ領ナリ
廿一日昨日ノ告ケニ依テ今日青地駿河守
和田和泉守等ニ五千ノ兵卒ヲサレソヘラレ
今日申剋江州武佐ヲ立テ河内表へ出陣ス
廿五日河内國ヨリ告來一揆ノ大將三笠右
馬頭ト云者ヲ城中ヨリ討テ出シ殘ル者共
命ヲ助ケ玉ヘト云
茲城ヲ請取殘ル者ノ内

七十三人ハ頭人ノヨシニ候間悉首ヲハ子殘
ハ追拂仕ルノヨシヲ言上ス屋形前田三右衛
門ヲ召シテ委記サル

同廿九日ニ河内へ向フ兩將江陽ニカヘル今
日酉剋ニ觀音城ノ本丸ヨリ光物箕浦ニサ
レテトブ

十一月

四日去月河内國若江ノ一揆退治ノ兩人青
地駿河守和田和泉守ニ屋形御感狀ヲ賜フ

其詞二曰

今度河内國若江城一揆等強發因茲為退
治兩人差越之處早速右馬頭光成誅戮計
畧之條不可勝計御加増地下給候彌可抽
忠信者也仍如件

開元永祿六年十一月四日

義秀御在判

青地駿河守殿

和泉守ニ賜ル所ノ御證文同キニ依テ

日記ニ畧之ヲ

廿八日今上皇御惱ニ依テ今日勅使三條大

納言江陽多賀ノ社ニ向ヒ玉フ屋形淺井下

野守祐政ヲ多賀ニツカハシ勅使等御馳走

可仕ノヨシヲ仰付ラル淺井襲束ヲ帶ヒ彼

宮ニ向ノ屋形此事ヲ聞テ大キニ怒テ三上

美濃守ヲ以テ淺井ヲ制セラル

十日十二月大雨不...

十日卯刻ヨリ大雨下テ酉刻ニ止雷ノ鳴動
スル事ヲヒタ、シクシテ將軍家ノ東門ニ鳴
落テ殿門多ク焼失ス江州東光寺ノ本堂雷火
ニテ炎上ス沙門三人爲雷死前代未聞ノ大
洪水ナリ終極月ニカヤウノ事ナシ洛中ノ
易者勘文ヲ以テ將軍家ニ言上ス甚天下ノ
兵乱ノ兆ナリト云云
廿三日細川晴元ノ館ヨリ火出テ國主ノ屋
形四十余間町九十二町焼失ス江陽ノ屋形

洛下六角ノ館モ不殘一間焼亡ス近代傳所
ナキ大火事ナリト云云洛中貴賤死人多三百
人ニ及フトナリ

二州... 洛中... 貴賤... 死人... 多三百... 人ニ及フトナリ

永祿七甲子年

正月

朔日天氣快晴觀音城出仕ノ次第等例年ノ
コトニ

二日京極長門守三男竹王丸卒ス行年十三
歲儒學ニ達シ和哥道且アリシ少人ナリ依
之屋形常ニ曰此竹王丸ハ先祖高秀ノ風ニ
ヨク似タリトテ屋形竹王丸ヲ高秀ト常ニ
又ワフシ玉ヒシナリ高嶋家ヲ相續アツテ竹

王丸ヲ其名跡ニスヘラルヘキニテアリシカ
竹王丸卒スルノ間大野木右馬頭ノ二男權
守ニ屋形高嶋ノ家ヲツガセラル

十五日辰刻大雨下午刻ニ地震屋形江陽ノ
八幡宮ヘ社參御一門旗頭等不殘供奉ス
十六日屋形佐々木御社ヘ社參昨日ノ面々
不殘供奉ス酉刻雪下ル

廿四日屋形比良山ノ愛岩ヘ社參去年造營
有テノ後終ニ社參ノ義ナシ今日始テ社參

御一門ノ面々計供奉セラル旗頭ノ内ハ江
西ノ面々計供奉ス

二月

八日今日彼岸ノ初日ナリ惠心院觀音城ニ
登城屋形御國ノ間ニテ對面ス屋形惠心院
ニ彼岸ノ義ヲ問ヒ玉フ惠心院ノ曰一切經
ノ内涅槃經ニクワシクアリトテ則筆ヲ取
テ即座記シテ屋形ニ獻セラル涅槃經曰
夫彼岸者以陽曇華料七日也此華春彼岸

初日開畢自散亦秋彼岸菓成也華色五色

也菓者如栢櫛是樹下七佛在而彼岸七日

間後善善人來押金印惡人來押鉄印閻羅

帝釋殿納是而其後後善根時七佛持出此

印而於十王前讚歎罪好惡彼岸内一日之

善者余日之勝自十日後芥子程之善令得

須彌程之德果行芥子程之惡受須彌程之

苦亡靈在生時好惡誌此印七日七佛名曰

初日毘婆尸佛二日尸棄佛三日毘舍浮佛

四日、狗留尊佛五日、拘那含佛六日、大迦葉
佛七日、釋迦牟尼佛各是佛体生死大海彼
岸者也七日之内不宿他家著新鮮衣參詣
佛神以一紙半錢志可願德果約彼岸日數
在戒初日起嗔恚者被因惡虫苦二日成妄
語被行彼羅之苦患三日為殺生者被登八
万丈之劍四日成人之憍慢者墮無間地獄
五日成賣買者被遍畜生苦六日背宗親之
心落火坑地獄七日起罵詈誶謗被行鐵石

推押之苦患如此分別善惡彼岸故也七日
之間十戒能修可念發願必得大佛果者也
十七佛能可奉供養者也秋之彼岸七佛之異
名也初日、扶腰菩薩二日、精進菩薩三日、禪
定菩薩四日、王念菩薩五日、輕安菩薩六日、
取捨菩薩七日、妙興菩薩也以下略之

屋形是ヲ取テ經意ヲヨク勘カヘテ曰彼岸
ト云ハ甚經意ノ如ニテハアアルヘカラス信實
本來ノ彼岸ヲ聞ントノ夕ニウ惠心院答曰

家經意ノ一、二可心得事ニナシ理觀ノ旨御
得心アルヘシ屋形答テ曰理觀ト云ハ面目ノ
業ナラン寂如來方便ノ真ト其奥義珍重ナ
リトノタマヘハ惠心院手ヲ打テ顔々相對シ
笑ヒ玉フ此外種々御法問アリトイヘトモ不
能載日記

十四日惠心院觀音城ヲ退テ山ニカヘラシ屋形
城下ニテ送り出テ曰離別ノ境イカニ惠心院
答曰會者定離ト答テサラシム

三月

三日佐々木御祭礼屋形并後見兼禎公其外
一門面々旗頭等社參今日未剋ニ屋形ノ母
公青樹院殿東光寺ニ詣テ玉フノ處ニ新庄
五郎八青樹院ノ御輿ノ前ヲ乗打ス供奉ニ
候目賀田徳之丞馬ヨリ飛下テ何者ナレハ
角ハ侍ルト怒ル新庄カ曰是ハ蒲生カ家人
ニテ候カ急用ノ義アツテ前後ヲワキニヘ
スト云青樹院御輿ノ内ヨリ聞玉ヒテ無礼

ハ乱ノ本ナリ其者ヲ誅スヘキナリトノタ
マフ目賀田家人ニ申付テ即座ニ此者ヲ誅ス
廿日膳所ニ國若ト云地下人去年四月ヨリ
天狗ニトラレ今月十五日古郷ニカヘツテ希
代ノ事ヲ口走ルノヨレニテ山岡美作守カ方
ヨリ今日觀音寺ニ言上ス則屋形其者ヲ召
寄テ一見アルヘキノヨレヲ仰ラル京極長門
守高吉折節登城シテ御前ニアリシカ大人ハ
アヤレキラ不見ト候トテ止ラル屋形一理

ノ立所モタヌ事トカレトテヤメラレヌ

廿八日大雷下申剋ヨリ酉ノ下剋ニ至テ止

四月

六日堅田ノ奉行磯初孫三即方ヨリ二尺余
ノ鮒ヲ觀音城ニ献ス魚ノクシ如紅

五月

五日佐々木祭礼屋形依病氣社參ノ義ナレ
進藤山城守御名代ニ彼宮ニ向フ御一門ノ
面々旗頭等ハ不殘社參ス今日佐々木宮ニ

於テ進藤山城守ト箕作殿ト前後ノ争ヒアリ
是ハ御幣ヲ拜ス時ノ事ナリ進藤カ曰常ノ
義ニ於テハ箕作殿ヨリ先ニ拜ス事アラシ
今日ハ既御名代ト有テハ各別ノ義ナリト
テ押取テ先ニ是ヲ拜ス兼禎公面目ナフシ
テサラレム旗頭等一面ニ刀ノ柄ニ手ヲカ
ケ争ヒノ間言葉ナシ往々ヨカラシト社參
ハ上下フウセリ
十五日夜ハ月如蝕宵ヨリ曉ニ至ル

廿三日山王早尾ノ社鳴動スルノヨシ社家右
馬權大夫カ方ヨリ觀音城ニ言上ス廿三日
午剋ヨリ同廿九日至テ彼社鳴動ス

六月

朔日ヨリ晦日ニ至テ一滴モ不下大旱ス江
州ノ湖水一丈余干上ル疫病ハヤリ五畿内
人多死ス將軍家ノ東門ニ夜々人ノ啼聲ス
ル事アリ三好下野守達上聞ノ處ニ近習ノ
面々ヲ番ニツケラレテ其事ヲタサレシニ

子、剋計ニ空ヨリ黒キ雲一村下ルトヒナシク
人ノ啼聲地ニヒ、キ渡ル番衆聲ヲカケヌレ
ハ彼、雲カキケスカ如ク消失ストナリ其外
洛中ニ不思義ノ事共多シ
七月
三日東光寺ニテ前、屋形ノ御爲ニ國中ノ非
人等ニ八木一舛ツ、ヲ施行セラル奉行粟
飯原采女正家人五十人ヲ以テ帳ニ記スニ
非人一万二千余人ト記ス五畿内ノ非人前

ヨリ此、事ヲ聞テ集ルト云彼、非人ノ中ニ關
東ノ住人三浦備中守時方ト云人アツテ見
出粟飯原其人ヲ召具ニ觀音城ニ來テ屋形
ニ言上ス屋形則三浦ヲ見玉ヒテ涙ヲ流サ
レテ曰、近世殊ニ以テ世ノニコル事言葉ヲ
絶ス貴方何トシテ角ハ成果ケルト問玉ヘハ
三浦申ハ重代ノ家人松田ト申者北條家ニ
ウラカヘリアタヲナスニ依テカナク所ヲ忍ヒ
出將軍家ニタヨリ年來ノ鬱憤ヲサシセシ

トテ十箇年以前ヨリ京都ニ上テ候ニ終其
沙汰ヲ言上スヘキ便ナクテカヤウニ成果テ
候ト申ス屋形粟飯原ヲ召シテ問ヒ玉フ汝ハ
何ニ依テ此人ヲ見出シヌルト仰ラレシカハ
粟飯原カ曰其人相カクレナク平人ニ異ナツ
テ見ヘ候ノ間引分故兼テ候ト申屋形粟飯
原カ眼カヲカニシ玉フ三浦ヲハ鎌倉孤獨齋
ト名ケ玉フテ常ニ御傍ニヲカレフヒニヲカ
ケ玉フナリ

廿五日尾州ヨリ織田家同名右馬助ヲ以テ
今日江東ニ越サル密狀アリ子細ヲ不知
廿八日屋形尾州ヘノ加勢ノ事有トテ青地
伊豫守平井加賀守永原大炊頭三人ヲ觀音
城ニ召寄テ廿五日尾州ヨリノ密狀ノ旨
ヲ仰付ラル織田信長外々ヨリ美濃國西方
ノ旗頭氏家常陸介同大膳亮稻葉伊豫守伊
賀伊賀守植村刑部少輔此五人ヘ密狀ヲツ
カハレ下心ヲ合齊藤右兵衛大夫龍興ノ居

城稻葉山ノ城ヲ攻落スヘキ旨ヲ定ム雖然
彼五人年來龍興旗下ニアレハ謀テ若シカヘリ
忠ヲ作ル事モ可有之尾洲ノ勢微弱ナレハ
江州ヨリ若シモアラシテハタテハサシテ
追討スヘキ爲ニ密シテ狀ヲ信長江陽ニコ
サルノ間各々ハ織田家ノ戦フ色ヲ見テ可
勸ナリトテ三千騎ニテ今日平井永原青地
ノ三人午剋ニ觀音寺城ヲ立テ美濃國ヘ向
フ屋敷重テ仰遣ス必信長ノ勢不勸先ニ當

國ノ勢トリカクヘカラス成ル事ニ侍ハ信長
一旗ニテ攻落スヤウニ可仕ナリ何ソ其國
ニウラカヘリ人有之合戦ヲ兩旗ニテ攻ヘキ
事甚勇將ノセサル事ナリ若西方五人ノ旗
頭信長ヲ謀テ國ニ引入押シツ、ンテ合戦ス
ル事モ有ニカタメニ信長角ハ頼三又ルソ
相カニテ下知シモラスナトノ御使ナリ

八月

二日酉下剋美濃國加勢ニ參シタル青地伊

豫守永原大炊頭平井加賀守カ方ヨリ飛脚
ヲ以テ言上ス其狀ニ曰

昨日午剋信長小牧山ニテ勢ヲ汰へ二千

五百騎ニテ濃州瑞龍寺ト申山へ勢ヲ上

テ諸勢ヲ龍興カ館へ攻カクルノ處ニ内々

信長ニ約シケル西方五人者共西門ヨリ

穴ヲカクル龍興ノ勢八百騎東ノ門ヨリ

打テ出信長ノ先手佐久間右衛門カ手ニ

ツキカ、リ戰フニ右衛門棄クツシ信長コ

ラヘス旗本ノ勢ヲ半分余右衛門カ手へ

加へ本丸ノ南へ向ケラル江州ヨリノ加勢

御下知ノ如ク北ノ方小石塚ニ陣ヲスへ

イニタカ、ラスコラへ候ニ龍興手勢三百

騎計ニテ北ノ方へ打テ出江州勢ニ戰合

ニ永原一番ニカ、リ二百三十騎打取ルノ

處ニ青地二番ニ入カハツテ戰フニ龍興又

タカイツカレ本丸へ勢ヲ打入候所ヲ平井

ヲツカケテ候カ五十三騎打取リ候カヤウ

ニ戰フ内ニ信長ノ勢早本丸ノ大門口ニ
攻入ル龍興同名元德齋ヲ出シテ命ヲ助
ケ玉ハ、城ヲ開退ヘキトノ使ヲ信長ノ方
ヘ立ル信長當手ヘ織田市介信成ヲ以テ
此事ヲ評義ス當手ヨリハイカヤウニモ可
然ヤウニトコタヘ申候信長思案モナク城
ヲ請取龍興ヲ退ラレ候龍興ハ勢州桑名
ヘ退候國司ノ弟木造刑部少輔ヲ頼ノヨ
シヲ兼候當手ノ人數長途ヲ打テ殊ノ外

取ニ草卧候ノ間明日ハ休メ明後三日ニ當
前地ヲ打立申ヘキニ定候此旨早可有言上
目恐惶謹言

八月朔日卯上剋

平井加賀守

進藤山城守殿

伊達出羽守殿

馬淵刑部左衛門殿

目賀田攝津守殿

三日酉剋美濃國加勢ノ三將觀音城ニ歸來
ル信長ヨリ前田又左衛門尉使節トシテ來
ル信長助勢大悦ノ狀アリ日記ニノスルニ不及
十三日美濃國加勢ノ三將平井永原青地ニ
屋形今日感狀ヲ玉リ加増ノ領地ヲ下レ玉ル
廿九日甲賀谷ヨリ白麻ヲ屋形ニ獻ス屋形
目賀田左内秀行ヲ以テ將軍家ニ獻セラル
前代未聞ノ義ナリトテ將軍家白麻ノ皮ヲ
取テ皇家ニ進獻アルト云云

九月二日

十四日豆洲ヨリ宰相良十兵衛ト云者來
テ今日一通ヲ屋形ニ獻シテ扶助ヲ請ル此
相良ハ武者執行シテ近年ハ駿州ノ今川家
ニ仕ヘテアリトナリ屋形三百貫ノ地ヲ行玉フ
廿日細川晴元將軍家ノ御勘氣ヲ蒙テ妙心
寺ノ大心院ニ入寺ス是ハ家札上月カ爭論
ノ事ニ依テナリ細川其身ニアヤニリナキト
イヘトモ想此

十月

三日大雪下ル近年五畿内ニテナキ事ナリ
諸鳥悉ク寒ニ死人道路ニタヲル
十五日江州坂本ニ二頭ノ子ヲ産スル女ア
リ今日彼子ヲ觀音城へ召具シテ來ル屋形
不見之

十九日江陽田山城鳴動ス此城ハ四方皆海
ニテクガニツク地ナシ佐々木九代ノ嫡領秀
義ノ御時ニ城ニ築カレシ嶋山ナリ國ニ事

有時必鳴動スル城山ナリ

十一月

三日澤田丹後守忠長ニ屋形諱字ヲ賜テ秀
長ト号ス江北ノ奉行ナリ

六日多賀ノ社造營スヘキノヨシ屋形今日
淺井下野守祐政ニ仰付ラル彼宮政頼ノ御

代造營ノ一ナリ當年百三年ニ至テ今及
此造營

廿一日山門西塔ノ本黒谷ノ上人觀音城ニ

來テ彼寺建立ノ義ヲナケカル屋形ノ族永
原安藝守高賢去ル北白川ノ合戰ニ討死シ
リシヲ黒谷ニテ葬シタル故ニ彼寺ノ義ニ
付テハ度々江陽ノ屋形其心ヲツクス
廿三日屋形上洛旗頭等江東江南討供奉ス
當年ハ江西江北ハ非番ニ依テ如此
廿九日屋形江東ニ歸座ス今日酉刻ヨリ大
雪下四尺余ツモル例年ニ替テ寒スル事甚シ
十二月スニ織山ナリ

十二月

十二月

十二月

十二月

十四日山田ノ浦ヨリ太刀一腰ヲ屋形ニ獻ス
綱ニカ、リ海ヨリ引上ルトナリ其太刀三所
ニスカシアツテ大キニソリタリ作ナレ屋形
由來アリトテ和田源左衛門尉正綱ヲ以テ
作生嶋ニ籠王フ
十八日進藤道圓入道卒ス行年九十三歳屋
形五代ニ奉公ノ人ナリ政頼高頼氏細義實義
秀公ニ至ル
十九日申刻地震白ヒケノ社人上岩戸ヨリ

白蛇水中ニ入ル近里ノ者數人其形ヲ見ル
廿四日屋形ノ母公青樹院殿自ラ召仕ヒ玉フ
女ヲ害ヒ玉フ此母公ハ男子ノ如ニテ甚武
キ女性ナリ當將軍家ノ御姉ナリ共將軍家
ノ仰ヲモ用ヒ給ハサル御事多シ

廿六日屋形ノ御乳人若狹局ノ息内記ニ所
領一所ヲ賜テ竹中十内左衛門ト号ス
廿七日箕作兼禎公近習武田三郎兵衛ヲ自
誅ス是ハ江雲寺ニ引籠玉フ息義彌ノ事ヲ

屋形ノ五奉行ノ内他田武大夫ニ惡ク語り
タルトガノヨシナリ

同日目賀田攝津守屋形ノ爲御名代上洛ス
廿九日印内ノ天陽大夫當年始テ大易曆ヲ
撰テ今日屋形ニ獻ス

江源武鑑卷第十終

五鳳為遊者... 十四... 公青柳院... 此母公... 大夫當... 同日自贊... 星妖ノ正奉... 廿廿田丸大夫



[Faded text on the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and bleed-through.]

